
アルカナ・オブ・ハーミット

三年寝太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカナ・オブ・ハーミット

【Nコード】

N8147Y

【作者名】

三年寝太郎

【あらすじ】

朝起きたら何故か布団から出れなくなっていた少年が一週間の間、妹のお世話に。出れると思ったらそこには黒髪青眼の美少女が居まして、「私は今から貴方の従者」なんて言い出す始末。そうして隠者のアルカナを従える少年が、命懸けの争奪戦に巻き込まれていくお話。異世界モノに対抗して現代ファンタジーで行こうぜ！そんな感じ。モバゲーでも掲載しております。

始まりの布団ライフ

とてつもなく寒い2月頃の冬の朝。

目が覚めた時に布団から出たくないのは何故なのだろうか。

一般的な感覚でいうなら、その理由はただ一つ。

単純に寒いから。

だが彼は違った。寒いことを理由に布団から出ないのではない。

精神的に、いや、物理的に出られないのだ。

六畳一間の一般的な狭い部屋。そこに引かれた二枚重ねの布団と毛

布の中で、彼は何かを待つようにただ目を開けていた。

彼の名前は桜井涼太

(さくらいりょうた)。

今年で十七歳になった現役の高校二年生である。誕生日を迎えたのは今日からつい七日前。

ただ、学校で誕生日パーティーを開いてもらうなどという表立ったキャラでもないの、数人の友達から祝福の言葉を受けただけだったが。

「……本当、どうなってんだろっな……これ」

涼太は一人呟く。呟かすには居られない位に、彼を襲っている現状というものはおかしなものであった。

一週間もの間、運動すらしていない鈍りきった体で、彼は寝返りをうった。

動かされることの無かった涼太の体は、それだけの動作で悲鳴をあげていた。

そんな中、襖ふすまをスツと開ける音がしたと思えば、制服姿の一人の少女が涼太の部屋の中に入ってきた。

そして心配そうな表情をしながら、彼女は涼太に語りかける。

4

「……兄さん、大丈夫？えっと、生きてるよね？」

彼女の声を聞いた涼太の顔はほころぶ。痛い体を動かし、涼太もう一度寝返りをうって彼女の方を向いた。

この少女がいる時間だけが、今の彼にとって最も安心出来る、まさに安息の時なのであった。

「ああ。大丈夫だし、生きてるよ。ただ体が少し軋んできているよ。うな感じはしてるけどな……」

苦笑い。

涼太は彼女が来てくれることが嬉しい反面、自分のどうしようもないこの境遇に呆れを感じているように思えた。

「そっか……。でもまだ、大丈夫だよ。ね。まだ兄さん生きてるもんね。」

上手く言えないけど、今を乗り切ればきつとちゃんとした未来が待ってるはずだから。ね？」

涼太を元氣付ける為に、精一杯の笑顔で彼女は笑う。

実際、彼女の笑顔に涼太は救われてきているのだ。

彼女が居なければ、涼太の心は今まで持たなかったかもしれない。

彼女の名前は桜井明日香

(さくらいあすか)。

現在十五歳の現役高校一年生。

桜井涼太の妹であり、今の境遇の彼女にとって唯一の生きる身内でもある。

逆に言っても同じことだが、明日香にとっても彼は唯一の身内であり、大切な家族なのである。

「一応だけど、メロンパン枕元に置いておくから、食べれるように

なったら食べてね。それじゃあ、学校行ってくるね。兄さん」

そう言い残すと、明日香は立ち上がり部屋から出て行った。

靴を履く音が涼太の寝ている部屋にも聞こえてくる。

「行つてきまーす」

元気な声と共に明日香は学校へと向かっていく。今日の学校では、どんな事が起きるのかなと、胸の内に微かな期待と不安を込めながら

(良いもんなんだな。学校に行けるってことは)

普段の自分はそんな事考えたことも無かったな、と、部屋の窓から明日香の姿を見送った涼太は布団の中で独り思う。

つい数日前まで、つまりは七日前の誕生日までは涼太も普通に学校に通っていたのだ。妹の明日香と同じく、掛山高等学校という名前の進学校に。

ただし兄妹仲良く毎日登校、ということをしてきたわけではない。

それはたまに朝の涼太の起床が遅い為、というか寝起きが異常に悪いことに起因している。

明日香が頑張つて起こそうとしても涼太は中々起きない。そういつた日は面倒なので明日香もいちいち涼太を起こす為に言葉を囁くことも当然しない。

そのため、常に大量の目覚まし器が涼太の枕元には置かれていたのであった。

何回も目覚ましを止めた所でようやく起床。

そして妹の明日香はとっくに学校に着いている時間帯に、遅刻寸前の中に滑り込むべく猛ダッシュで登校をする。

そんな日が週に二・三回はあったので毎朝明日香と登校する、ということは無かったのである。

そんな彼にとってはありふれた朝。

それが、ある日を境に訪れなくなってしまったのだ。

誕生日を終えた次の日の朝。

涼太は一切布団から出られなくなっていた。

精神的に、ということではない。

もしかしたら、いやもしかしなくても精神に由来しているのかも知れないが、涼太の体感的には物理的に布団から出られなくなっていたのである。

寝返りをうつことぐらいは出来るが、それ以外に何かをすることも出来ない。腕を布団から出すことも出来ない。足を布団から出すことも出来ない。

まさに手も足も出なくなっていたのだった。

何かをするには妹である明日香の力を借りる他ない。

勉強をするにもページをめくってもらい、朗読してもらい……。しいては本を読むにもゲームをするにも自力では出来ない。

まだ若い年であり、身体に一切障害のないはずの自分がこういった境遇に陥いつていることが、涼太にとって、辛かった。

さらに不思議なことに、その日を境に涼太は物が食べれなくなってしまった。

そして同時に一切の排せつも行われなくなった。さらには眠ることさえも出来なくなったのだ。

それ故に今日までの間三日程、

『眠れないのは怖いと思うから、私は兄さんの側にずっといるよ』

そう言って、部屋に小さな机と小型のテレビを持ってきて明日香は付きっきりで涼太の側に居てくれたのである。

休日を挟んでいたので実質明日香が学校を休んだのは一日だけだったが、それでも涼太にとっては涙が出そうな位に嬉しいことだった。

ただし涙さえも涼太からは出なくなっていたが。

明日香は涼太を医者には見せていない。涼太もまた医者に見せることを嫌がった。

明日香曰わく、

『取りあえず様子を見てみるべきだよ』

涼太曰わく、

『俺ヒツキー扱いにされそう』

よって今の所まだ医者に見せてはいない。

だがこの症状は明らかに異常であり不可思議なものだ。

そして物は食べれないが故か、涼太の空腹感は徐々に増幅していった。

食べようにも、涼太が口を開いて食しようとするれば涼太の意志に反して口が強く閉まって、しまうのである。

だが六日間もの間水も何も食べていない状況、と思える程の空腹感でもないという、さらに不思議な状況だった。

ただし寝返りをうつと痛いようなので、確実に涼太の体は弱っているようだが。

明日香が学校に行ってしまうと、涼太は余りにも暇になってしまう。

現在涼太の学校は新型コロナウイルスによって7日間の学年閉鎖中である。

現在の涼太にとっては欠席日数的にかなり都合の良い状態のだが、それ故に友人が訪れることも無い。

涼太自身も新型コロナウイルスに掛かっている、ということになっているからだ。

目が覚めているのに布団から出てこれなくなった涼太を見た明日香が、学校にそういった連絡したからである。

そのおかげで学年閉鎖が確定したのだというから、かなりの幸運だ。まさに不幸中の幸い。

ただし当然のごとく友人さえも家を訪れることも無くなった。

誰が好き好んで新型コロナウイルスにかかりに行くか、ということである。

結局の所この数日間というもの、涼太は明日香以外の人物と会っていない。

だが、それ程寂しい訳でも無かった。

唯一の家族である、

明日香が側に居てくれたから。

今の自分の不思議な状況をしっかりと受け入れてくれたから。

明日香も初めは多少は疑いもしたが、最終的には自分の言っていることを信じてくれた。

そして自分は精神的に病んだ事が理由で布団から出られなくなった
り食事をとれなくなっただけでは無いということもだ。

大体、涼太が精神的に病む理由など本人にすら無かった。

「これだけ何もせずにいるなら、なんか悟りでも開けそつだな」

現実、一切の食べ物も口にしていない上に一つの場所からでることさえしていない。

人間暇な状況な状況に陥れば、大抵の場合は思考に入る。

いわゆる妄想や瞑想といわれるものだ。

そういつた境地に陥ったとき、初めて人は悟りを開くとは言われている。だがあまりに暇すぎると、意識に反して眠気が襲ってくるものだ。

しかし今の涼太にはその睡眠すらも許されない。

自分の意志で体でもない、それ以外の何かが全力でそれを拒否していた。

時の感覚すら無く、ただ横に見える時計の針の音を聞きながら過す。

静寂に包まれた部屋にチクタクと音が鳴り響く。それ以外のことはなにもない。

そんな中、違う音が鳴り響いた。玄関の開く音だった。

「ただいまー」

そう言って靴を脱ぐ音が聞こえてきた。そのまま真っ直ぐ自分の部屋に近づいて来る音が聞こえる。

静かに襖は開かれた。

「お疲れ、兄さん。まだ生きてるよね？」

厚着の制服姿のまま正座をし、たった今帰ってきた明日香は涼太に尋ねた。

生きてるよねという言葉は、今の彼らにとっての挨拶のようなものだった。

「ああ。生きてるよ、明日香。まだ大丈夫だ」

そして涼太もそう答えるのが今の彼らの日常。

この瞬間の彼らの間には、どこか異界めいた奇妙さが感じられる。

涼太の無事な姿を確認した明日香は、料理をするために台所へ向かった。

基本的にこの家で料理を作るのは明日香の仕事となっている。ただし今の状況においては一人分の料理しか作らないのだが。

「兄さん、今日何か変わったことはあった？」

小さな机と作った料理を運んできた明日香は、気になることを尋ねた。

「いや、特に何も起きなかったよ。腹が減るわけでもないし眠りに付けるわけでもない。昨日や一昨日とも何も変わってないさ。」

「……ただ、」

「ただ？」

「悟りでも開くかのような感覚になったのはあるかな。あんまりにも暇なものだったから」

そういつて涼太は笑う。

正直な感想だった。

「だったら、そのまま悟りを開いちゃえばいいかもね。そしたら今の不思議な状態から回復出来たりして」

冗談を交えた口調で明日香もそれに答える。本当にそうだったら良いのに、と心で思いもしたがそれは口には出せなかった。

「さてと、今から私、お風呂行ってくるから。何かあったら呼んで

ね

先程の会話から暫く時間が経ち、話も終わった頃。

そう言っつて明日香が立ち上がるうとした時、ふわりとスカートが僅かに広がった。

「……………今日の色は黒なんだな。お前には白が似合っと思っけど」

丁度良い場所に寝転がっている涼太の視線に明日香のスカートの中心がジャストミートした。

そして本人も知らぬ間に素直な感想が涼太の口からぼそりとかぼれていた。

「似合う似合わないの問題じゃないよ。冬は黒！夏は白って私は決めるの。」

……ちなみに今私のパンツを見たのが兄さん以外だったら半殺しにしているから。

良かったね、私の兄妹で」

冷やかな口調でそう告げる明日香。その言葉に言いようもない恐さが含まれていた。涼太はその時、心底自分が明日香の兄であったことに感謝したのだった。

そういえば、と、部屋から出ようとしていた明日香が呟いた。

「ねえ、兄さん。もし私が……。どんな理由があったにしろ、誰かに殺されたりしたら、どうする？」

不安そうな顔で明日香は涼太に尋ねた。この質問にどんな意味があるのだろうか、と考える間もなく涼太は即答する。

「そいつを死ぬ寸前まで半殺しにしてから、その後法廷に突き出す
だろうな」

実際に明日香が死んだわけでもないのに、涼太は顔に怒りの表情を
浮かべた。想像するだけでも強い憎しみが湧いてきていた。それほ
どまでに、明日香の存在は彼にとって大きいのだ。

「流石は兄さん。そうやって直ぐに判断出来る所はカッコいいと思
うよ。……うん。そうやって言ってもらえるのは凄く嬉しい」

でもね、と明日香は付け加えて静かに言った。

「兄さんが死んだ場合は、私は迷いなくそいつを殺すから」

そう言い放つ彼女の言葉には、余りにも冷たい意味が込められていた。

それがどんな理由であれ、そしてどんな状況であったとしてもその者を殺すという明確な殺意。

しかし、ただ一人の兄という存在に向けられた愛情がそこには含まれている。

「はは……。そうならないように、気をつけるとするよ」

躊躇うことなしにスッパリと断言されたその明日香の言葉に、嬉しさ半分恐さ半分で涼太は答える。

絶対に事故になんかあうことは出来ないな、と涼太は内心本気で思った。

その後明日香は襖を閉め、風呂場へと向かって行った。

最後に明日香と一緒に風呂に入ったのはいつだったかなー等という間抜けなことを考えながら、涼太は再び寝返りを打とうとした。

が、その瞬間。一つの異変が訪れていた。

涼太が動かした腕が、今までテコでも動かなかった布団を払いのけたのだった。

（今なら、布団から、出られる！？）

瞬間的に涼太はそう考えた。腕が布団をどかせるならば、と次に足を動かす。すると今まで絶対布団から外へと出なかった足をいとも簡単に出すことが出来るようになっていた。

意気込んで体全体を転がるように動かし、そして涼太は布団をの
から脱出した。

涼太の七日間の布団ライフが、今この瞬間をもって終わりを告げ
のだった。

体にくるまった布団から顔を出すと、涼太は小さく手に握り拳をつ
くり、喜びを噛み締めた。

しかしその感情は、目の前に突如と現れた存在を目の当たりにした
瞬間、別の感情へと切り替わった。

「お疲れさまです。涼太様」

そこに居たのは、一人の少女。

年齢は明日香と変わらないくらいだろうか。

長い黒髪にフードを被っていた。フードに隠れて顔はよく見えないが、いきなりすることに困惑している涼太としては見る気にもなれない。

彼女は落ち着いた様子で俯いたまま、静かにその場に正座していた。

「だ、誰だお前は」

忌々しくも自らをそこに縛り付け、出られなくしていた布団から逃れることが出来たことに対する喜びよりも、

目の前の少女に対する恐怖の方が今の涼太には勝っている状態だった。

故に涼太の口から出たのは疑問の声。

それを聞き、少女は顔を上げ、涼太の目を見据えて答えた。

「私は隠者のアルカナ。序列で数えるならば9番目に位置する存在です。」

……貴方は試練を終えました。よって私は、この瞬間をもって貴方の所有物となります」

始まりの布団ライフ（後書き）

隠者のアルカナが登場しましたね。

この娘が主人公の命運を分けるパートナー的アルカナとなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8147y/>

アルカナ・オブ・ハーミット

2011年11月24日02時53分発行